# 小説「センチメンタル」読本

塩澤源太の小説

## 「センチメンタル（短編集）」の世界が広がる、見えてくる。

読んだ人も、これから読む人も。
豊富な写真や関連知識で作品を解説した、
あなたの中の“センチメンタル”を深める一冊。

PDF Download Edition

# 小説「センチメンタル」読本

## 目次

3　はじめに
4　「センチメンタル」の世界
13「かたち」の世界
21「パルテノペ」の世界
29「花壇のアトリエ」の世界
37 Maruyama Rumi(表紙イラスト)
38 あとがき

「センチメンタル(短編集)」センチメンタル・かたち・パルテノペ・花壇のアトリエ

**Amazon.co.jp**
http://www.amazon.co.jp/-/e/B00E8D9CY0/
「センチメンタル(短編集)」は表題作「センチメンタル」を含む「かたち」「パルテノペ」「花壇のアトリエ」の4編を収録。
1編ごとの単体版も同時に展開。上記URL、或いはAmazonで著者名の「塩澤源太」と検索してください。

# はじめに

この書籍は塩澤源太の小説「センチメンタル(短編集)」を紹介するガイドブックです。小説の世界観をより広げていただくために、多くの写真や関連知識を掲載しています。さらにこの作品をまだ読まれていない方にも興味を持っていただけるように、作品のあらすじや登場人物の関係図も掲載しています。

この書籍は無料でご覧いただけますが、販売先によっては有料であるため、今このページをサンプルでご覧いただいている方は、下記のウェブサイトにアクセスしてください。全てのページが無料でご覧いただけます。

「センチメンタル(短編集)」に収録している4編は、どれも女性が主人公の、思い出に纏わるお話です。少女と青年の交流を描いた表題作「センチメンタル」、結婚や家族の絆を再発見する「かたち」、高校生の少女と二人の少年の夏休みを描いた「パルテノペ」、過去の傷を癒せない女性二人の物語「花壇のアトリエ」。

どこか懐かしく、温かな雰囲気を持つ物語の魅力がさらに伝わるように、このガイドブックを作りました。併せて読んで、小説の世界を堪能してください。

なお、この書籍で紹介しきれなかった内容は、下記のサイトでブログとして紹介していますので、お暇なときに覗いてみてください。

ウェブサイト：　http://www.gentashiozawa.com/
書籍ダウンロード：　http://www.gentashiozawa.com/novel/download.html

# No.1

# 「センチメンタル」の世界

その気持ちが抑えきれなくなったとき、
ようやく私は理解した。
この感情は、恋愛という感情だったのだ。

「センチメンタル」より――結希のことば

東京都文京区関口 胸突坂

# 他人（ひと）を想い、自分を知る
## 「センチメンタル」あらすじ

「センチメンタルってどういう意味？センチメートルとは違うの？」

小学生の結希の無邪気な質問に、隣に住む大学生の啓介は「センチメンタルは思い出や気持ちの深さを表す単位」だと教えてくれる。その日以来、結希は啓介に勧められるまま周囲の出来事を「センチメンタル」という単位で計測し、日記に書き留めていくようになる。

お姉ちゃんのシュークリームのこと、可愛がっていた亀のこと、近所のおばあちゃんの戦争体験。さまざまな出来事を通して、結希は自分のことよりも相手の気持ちを思いやるほど「センチメンタル」の値が大きくなることに気付いていく。そして、いつも傍にいてくれる啓介にも、大きな「センチメンタル」を抱えていたことを知る。

啓介に笑っていてもらいたい、彼のために何かをしてあげたい。そう願う結希だったが、あるとき今まで経験したことのない、ある感情が芽生えていることに気付いてしまう。

他人を知り、思いやる。「センチメンタル」を通して少女は学び、大人になる準備をする。柔らかな日差しに照らされながら成長する、ひとりの少女の物語。

「センチメンタル（短編集）」
「センチメンタル」

**Amazon.co.jp**
http://www.amazon.co.jp/-/e/B00E8D9CY0/

「センチメンタル（短編集）」は表題作「センチメンタル」「かたち」「バルテノペ」「花壇のアトリエ」の4編を掲載。
「センチメンタル」のみの単体版もあります。
上記URL、或いは著者名の「塩澤源太」で検索してください。

# 人の持つ優しい気持ち

## 著者 塩澤源太

今まで私の小説のアイデアは、暗いテーマのものばかりでした。たまには読んでほっとするような、優しい気持ちになるものを作ってみよう、そう思ってこの作品に取り組んでみました。

そこで、私が優しい気持ちになるときはどんなときかを考えてみました。そして見つけたのが、街を散策している時間でした。偶然出会った人々と立ち話をしたり、季節の移り変わりを見ているうちに、なんだか気持ちがふんわり和らいでくるのが分かります。そして、ほんのりですが人に優しくしたい気持ちがわいてきます。そんな散策時の雰囲気を、私の好きな目白台、雑司ケ谷の情景を織り交ぜながら表現してみました。

また冒頭で、主人公の少女と青年が「センチメンタル」と「センチメートル」の違いを話すエピソードを入れています。この微笑ましいやり取りは、私と知り合いの娘さんが実際にやり取りしたものを下地にしています。このときの交流は私をとても優しい気持ちにさせ、いつまでも心に残る大切な思い出となりました。その気持ちも、かたちとして残しておきたいと思い、取り入れてみました。

人に対する思いやりや、愛する人へ抱く切ない感情は、美しく普遍的なものだと思います。この作品を読むことで、皆さんも優しい気持ちになれたら嬉しく思います。

# 「センチメンタル」の舞台 目白台、雑司ケ谷周辺

## 月の湯（文京区目白台 マップ①）

昭和六年開業の都内最古の木造破風造りの銭湯。現在も当時の佇まいを残したまま営業している。
劇中では結希がペットの「亀太」に出会うシーンがあるが、その前に訪れていた銭湯はここがモデルとなっている。
JR目白駅から都バス（白61系統）目白台三丁目下車、徒歩2分。東京メトロ有楽町線・護国寺駅より徒歩8分。

# 緑と坂の街、目白台・雑司ケ谷

## 主人公たちの道のりを辿る

小説「センチメンタル」の舞台となる目白台、雑司ケ谷周辺は、山手線の内側という都会にありながら、静かでゆったりとした時間が流れる緑の美しいエリアです。椿山荘や東京カテドラル聖マリア大聖堂、鬼子母神や雑司ケ谷霊園などがあり、散策ファンの密かな人気スポットとなっています。

主人公の少女、結希はこのエリアに生まれ、大学生の啓介に影響を受けながら成長していきます。

二人は急勾配の坂を上り下りしては語り合い、通りすがる人々と交流し、「センチメンタル」とは何かを探っていきます。彼らのやり取りはとても愛らしく清々しくて、どこかこのエリアの持つ優しい雰囲気と重なってみえます。

### 目白台一丁目遊び場

（文京区目白台 マップ②）

目白通りと不忍通りがぶつかる交差点にある児童公園。高台の上に位置し、公園の南側から東京の景色が一望できる。
たばこ屋のお婆ちゃんが幼馴染の勝彦さんと再会したときに訪れた公園のモデル。
JR目白駅から都バス（白61系統）高田一丁目下車、徒歩2分。東京メトロ有楽町線・護国寺駅より徒歩15分。

# 散策マップ

## 小説に登場するスポットを紹介

目白台と雑司ケ谷は、入り組んだ丘陵の地形にあり、場所によってさまざまな表情を見せてくれます。歴史的建造物も多く、見所がいっぱいですが、ここでは小説の舞台になったスポットを紹介します。

昭和六年から営業している月の湯、見晴らしのよい目白台一丁目遊び場など、ドラマや映画のロケ地でも有名な場所もありますが、あまり知られていないスポットも登場しています。それぞれのスポットを繋ぐ道のりを歩きながら、結希や啓介が訪れたかもしれない場所を自分なりに探してみるのも面白いかもしれません。

❶ 月の湯
❷ 目白台一丁目遊び場
❸ 胸突坂
❹ 水神神社（水神社）
❺ 金魚屋さん
❻ 椿山荘（江戸川橋）
❼ 雑司ケ谷霊園

## 胸突坂

（文京区目白台 マップ③）

目白通りから神田川に続く急勾配の坂道。両脇には永青文庫や関口芭蕉庵がある。啓介に腹を立てた結希が歩いた坂のひとつ。
JR目白駅から都バス（白61系統）目白台三丁目下車、徒歩7分。東京メトロ有楽町線・江戸川橋駅より徒歩15分。

## 水神神社（水神社）

（文京区目白台 マップ④）

胸突坂の隣にある小さな神社。二本の大きな公孫樹（イチョウ）の木が印象的。物語終盤で結希と啓介が話し合う場所。
JR目白駅から都バス（白61系統）目白台三丁目下車、徒歩7分。東京メトロ有楽町線・江戸川橋駅より徒歩15分。

## 金魚屋さん

（文京区目白台 マップ⑤）

目白台一丁目遊び場の近くにある金魚屋さん。軒先に年季の入った水槽がいくつか並べられている。結希がペットの「亀太」を買ってもらった場所。
JR目白駅から都バス（白61系統）高田一丁目下車、東京メトロ有楽町線・護国寺駅より徒歩15分。

## 椿山荘下（江戸川公園）

（文京区目白台 マップ⑥）

神田川沿いに伸びる細長い石畳の小路。椿山荘にも面しており、緑豊かな美しい風景が続く。
小説中「椿山荘のまわりをぐるっと歩き」というくだりがあるが、そうする場合はここを通ることになる。
東京メトロ有楽町線・江戸川橋駅より徒歩3分。

# 雑司ケ谷霊園

（豊島区雑司ケ谷 マップ⑦）

夏目漱石など多くの著名人が眠る霊園。うっそうと茂る草木に囲まれながら散策していると、都心にいることを忘れてしまうほどの静けさ。霊園のすぐ隣には都電が走っているので、散歩の移動にも便利。
小説に登場する兄弟のお墓は、創作ではなく実際この霊園に存在する。興味のある方は探してみては。
都電荒川線・都電雑司ヶ谷駅より徒歩2分。東京メトロ有楽町線・東池袋駅より徒歩7分。

# No.2

# 「かたち」の世界

東京メトロ丸ノ内線 四ッ谷駅

# 結婚とは、家族とは
## 「かたち」あらすじ

挙式を一週間後に控えた未帆は、憂鬱な気持ちでいっぱいだった。彼女とって結婚や家族という関係は、心のこもっていない空っぽの「かたち」として映っており、愛する男性とそのような関係になることに抵抗を感じていたからだ。

未帆には、まわりとは異なる家庭の事情があった。彼女が中一のときに両親が離婚し、母親に引き取られ、すぐに再婚した父親と血の繋がっていない妹と一緒に暮らすことになった。繰り返す引越や、えこひいきをする父親、八つも歳の離れた妹との関係に戸惑い、思い悩む日々が続く。何度も打ち解けようと自分から歩み寄ってはみたものの、うまくいかなかったので今はもう諦めてしまった。彼女はそんな過去のわだかまりを抱いたまま、家を離れることになる。

しかし結婚までの七日間、家族や婚約者たちとの会話を通して、未帆は「かたち」という関係を改めて振り返り、向き合っていくことになる。

苦い思い出を見つめなおし、まわりの人々の思いを受け止めながら、新たな一歩を踏み出していく。東京の街ですれ違いそうな、どこにでもいる女性の成長物語。

「センチメンタル（短編集）」
「かたち」

**Amazon.co.jp**
http://www.amazon.co.jp/-/e/B00E8D9CY0/

「センチメンタル（短編集）」は表題作「センチメンタル」「かたち」「パルテノペ」「花壇のアトリエ」の4編を掲載。
「かたち」のみの単体版もあります。
上記URL、或いは著者名の「塩澤源太」で検索してください。

# 登場人物と関係図

小説「かたち」の主人公、結希には、少し複雑な家庭の事情があります。

中学入学と同時に両親が離婚、そしてすぐに新しい父親と妹が現れます。大好きだった以前の父親のことが忘れられないまま、新しい父親と一緒に住む羽目になり、歳の離れた妹の面倒だってみなくてはいけない。母親は未帆を置いて、すぐに新しい家族に馴染んでしまう。

未帆は困惑しながら皆に溶け込もうと努力をしますが、思いはうまく届かずに苛立つばかりです。

しかし多感な思春期を過ぎると、未帆は精神的にも経済的にも自立できるようになります。家族の他に信頼できる人を見つけ、結婚を受け入れ、自分が新たな家庭を作るとき、未帆はかつて自分本位でしか捉えていなかった家族のことを、あらためて考え直すきっかけを掴むことができます。

## 未帆

主人公。企業に勤めるごく普通の女性。明るくて人当たりのよい性格だが、頑固なところがあり、とりわけ父親に対して評価が厳しい。

結婚

### 哲也

未帆の大学時代の先輩で婚約相手。のんびりしているが、未帆を大事に想っている。

憧れ

### 弓子

未帆が新卒だったときの上司。独身のキャリアウーマンで未帆の憧れの存在。

## 家族（再婚家庭）

### 母

いつも明るい未帆の母親。家族の中で唯一未帆と血が繋がっている。

離婚

### 離婚した父

未帆が理想とする、明るくて男らしい父親。家族を残して別の女性の元へ去ってしまった。

### 父

意思疎通が下手な母の再婚相手。未帆が最も苦手とする人間。

### 稚恵（ちい）

八歳年下の父の連れ子。元気で明るい性格で、人に好かれるのが得意。

病死

### 父の前妻

父が愛した前妻。稚恵の本当の母親。稚恵が生まれてすぐに病死した。

# 「かたち」の風景

## 非日常の日常

東京都文京区春日周辺

# 東京の日常風景
# 空が見える地下鉄

小説「かたち」では、主人公となる未帆の物語が展開するなかで、地下鉄の描写が数多くみられます。冒頭の四ツ谷駅に始まり、丸ノ内線御茶ノ水駅近くにある神田川橋梁、赤坂見附駅から永田町駅へ続く連絡通路など、固有の名称は記されていませんが、これらの路線を利用している人であればピンとくる描写ばかりです。また、未帆は頻繁に地上を走る路線を利用しているので、総じて丸ノ内線沿線で生活していることが分かります。

一日利用者数が東京メトロ全体で六百万人以上、丸ノ内線だけでも百万人を超えることからみても、地下鉄の風景は東京に暮らす人々にとって馴染み深い日常の一部だということが分かります。

未帆の家庭環境は他と比べて少しだけ複雑ですが、最近では再婚家庭はさほど珍しいものではなくなってきています。また、そのような環境でなくても、誰しも家族や結婚に対して悩みを抱えているものだといえます。

地下に広がる鉄道網、空の下を走る地下鉄、これらは少しだけ非日常的に見えますが、そこに住む人々にはごく普通の風景でもあります。この作品での地下鉄は、主人公の置かれた「非日常的な日常」の環境を、静かに演出する舞台装置のようにもみえます。

この路線は、過去の記憶を突然呼び覚ますように、
目の前の景色をいきなり明るくして、
またすぐに暗闇に戻る。

「かたち」より――未帆のことば

東京都文京区御茶ノ水 聖橋・神田川橋梁

# 東京メトロ丸ノ内線
# 四ッ谷駅

四ツ谷駅はJR東日本の中央線と総武線、東京メトロの丸ノ内線と南北線が停まる立体交差の駅。
JRの上に地下鉄が走る不思議な構造をしているが、外堀の緑豊かな雰囲気とあいまって、独特の景観を作り出している。特に丸ノ内線のホームからの景色は美しく、春には車窓から外堀に咲く桜を眺めることができる。
劇中ではこの場所で、未帆が電車を待つシーンがある。

## 丸ノ内線 茗荷谷駅（写真上）

茗荷谷駅から後楽園駅までの区間は地上を走るため、開放的な雰囲気を味わえる。茗荷谷駅は閑静な住宅街に位置し、丸ノ内線の中でもとりわけ上品さが漂う。未帆の家はこのあたりに位置すると思われる。

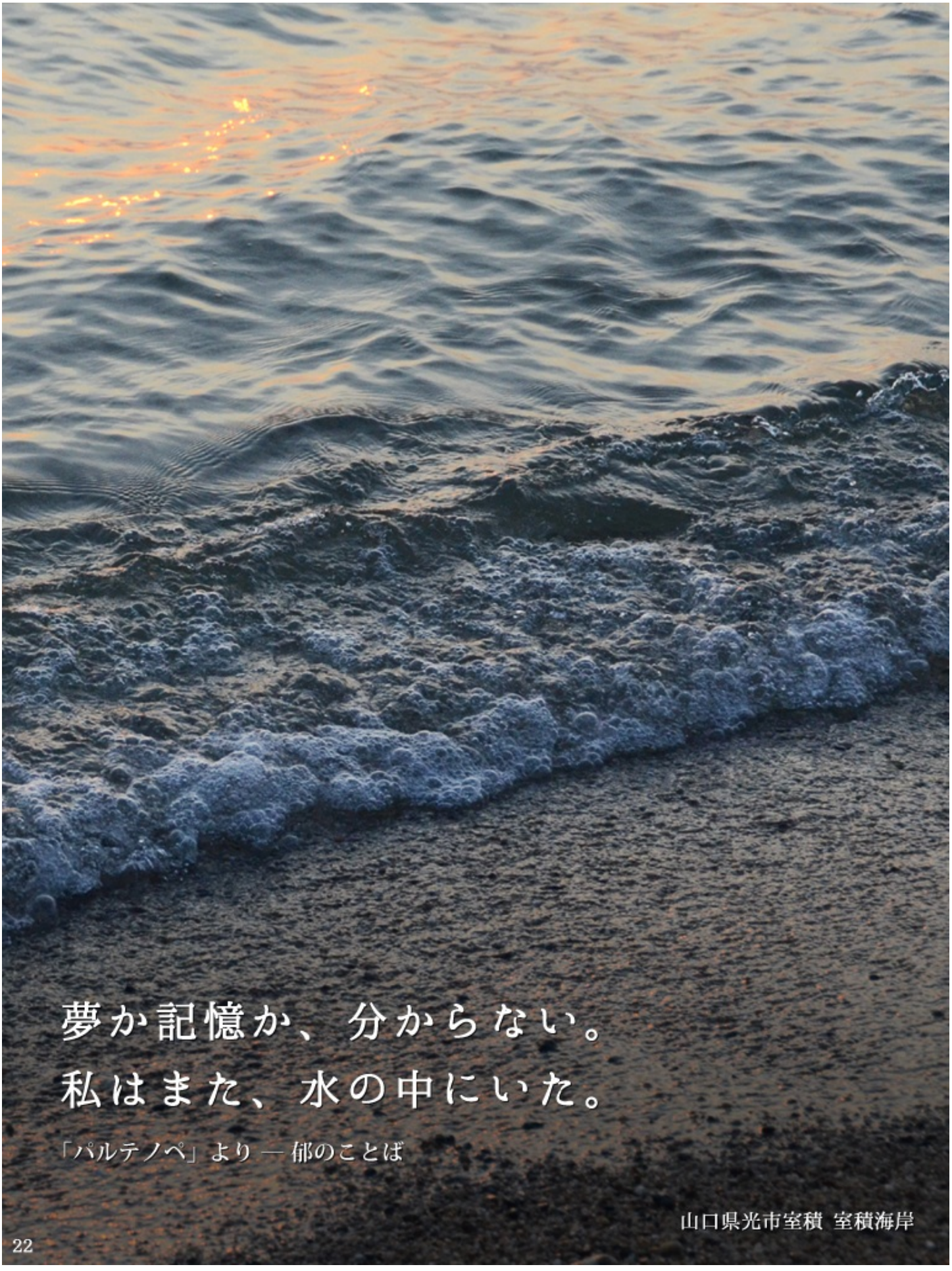
## 赤坂見附駅 連絡通路（写真下）

赤坂見附駅から永田町駅へ繋がる連絡通路。地下迷路のような通路が約250メートル以上続いており、辿りつくまでに階段やエスカレータを数回上り下りしなくてはならない。小説内ではここを未帆と哲也が会話をしながら歩いている。

# No.3

# 「パルテノペ」の世界

山口県光市室積 室積海岸



夢か記憶か、分からない。
私はまた、水の中にいた。

「パルテノペ」より — 郁のことば

山口県光市室積 室積海岸

# その声は何処へと誘う

## 「パルテノペ」あらすじ

それは毎年訪れる、いつもの夏休み。高校二年生の少女・郁は、幼馴染の聡志がアメリカへ引っ越してしまうことを知る。夏休みが終わったら、聡志は遠く離れた存在になってしまう。幼いときに過ごした芦室の海もそうだった。大好きだった優しいあの海も、親の転勤でなすすべもなく手放した。いつも傍にあったものが失われてしまう。しかし郁は自分からは何もできないまま、懐かしい海の思い出にすがるように、ひとりプールで水に漂っていることしかできなかった。

見えない自分の将来、失われゆく大切なとき。ぼんやりとした焦燥に包まれる彼女のもとに、突如ひとりの転校生が現れる。陽太と名乗るその少年は、どこか懐かしくて不思議な印象だった。彼はすぐに郁や聡志と仲良くなり、夏休みを三人で過ごすことになる。彼の優雅に泳ぐ姿と、本当の喪失を味わったものだけが持つ寂しげな表情を見て、郁は陽太に興味を抱いていることに気付く。

心は遠く海の彼方へ。海原から聞こえてくる声は、少女たちを何処へ誘うのか。追憶と現在の気持ちの狭間で、彼らは向かうべき道を模索してゆく。水に愛された少年少女たちの、ひと夏の青春物語。

「センチメンタル（短編集）」
「パルテノペ」

**Amazon.co.jp**
http://www.amazon.co.jp/-/e/B00E8D9CY0/

「センチメンタル（短編集）」は表題作「センチメンタル」「かたち」「パルテノペ」「花壇のアトリエ」の4編を掲載。
「パルテノペ」のみの単体版もあります。
上記URL、或いは著者名の「塩澤源太」で検索してください。

# 登場人物と関係図

高校生の郁、聡志、陽太の三人が登場する青春小説「パルテノペ」。

主人公の郁と幼馴染の聡志は、親が同じ会社に勤めている関係でずっと一緒に過ごしてきました。出生地の東京、小学二年生のときに過ごした芦室、そして一年後に再び戻った東京でも、二人は一緒でした。しかしそんな十七年の歳月も、聡志が海外へ引越すことで終止符が打たれます。

二人で過ごす最後の夏休み、彼らはひとりの少年に出会います。陽太というその転校生は、父親の都合で日本各地を転々とし、友達を作れず寂しい思いをしてきました。そのうえ母親とも別れて暮らしています。大好きだった芦室での日々を未だに忘れられない郁たちは、そんな陽太に共感し、夏休みを一緒に過ごすことにします。彼らは語り合い、ふざけあうなかで、掛替えのない友情を育んでいきます。

## 郁

主人公。高校二年生の少女。幼少のときに過ごした芦室の海を忘れられずに、いつもプールに入っては安らぎを感じている。魚のように泳ぎが得意。

幼馴染

## 聡志

郁の幼馴染の少年。いつも郁をからかっているが、彼女を誰よりも大切に想っている。

**友情**

転校生

## 陽太

夏休みに転校してきた少年。どこか不思議な魅力がある。郁よりも泳ぎが上手い。

## 郁と聡志の生い立ち

小学一年生　小学二年生　小学三年生　高校二年生

東京　芦室　東京

郁と聡志は一緒に育つ。二人とも親の都合で東京から芦室へ引越し、再び東京へ戻る

郁と聡志の父親は、同じ会社で働く研究員。二十年来の付き合いで親友同士。その関係で郁たちは、生まれてからずっと一緒に育つ。彼女たちが小学二年生のときに山口県の芦室にラボが開設され、郁たちも移り住んだが、その一年後には閉鎖されてしまう。結局二人は家族と共に、再び東京に戻ることになった。

# 室積

## 芦室のモデルとなった街

物語のキーポイントとなる瀬戸内海の街、芦室。ここは山口県にある室積という街がモデルとなっています。

室積は海を抱きかかえたように張り出す室積半島に位置し、昔から港町として栄えました。その半島から細くなだらかに伸びる象鼻ヶ岬は、その美しさによって天橋立になぞられ周防橋立とも呼ばれています。

瀬戸内海の波は穏やかで、山々の緑も豊かです。郁や聡志が幼いときに過ごし、離れてもずっと心の中に大切にしまっておいたのも、頷けるような気がします。

芦室の描写は限りなく室積に近いものですが、演出上一致しない箇所もあり、架空の「芦室」という地名になりました。

山口県光市室積 象鼻ヶ岬

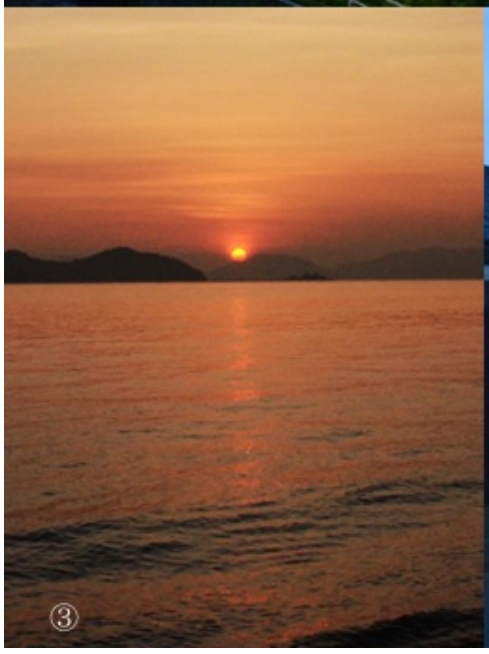
# 郁たちの見た風景

①瀬戸内海沿いに続く国道の道。
最寄りの光駅からバスに乗ると、この風景に辿りつく。郁が芦室の海と再会したときは、このようなおおらかな風景が広がっていたことだろう。

②象鼻ヶ岬にある学校。小学二年生の郁と聡志は、芦室の学校で友人たちと楽しく過ごす。

③室積海岸からの夕焼け。この美しい景色を見ながら、郁と陽太は聡志について語り合う。

④夜に差し掛かった室積の街。雲が空を覆っている。郁たちが海に訪れたあと次第に天気は崩れていった。



# パルテノペとは

## セイレーンとケンタウロス

(A Siren and a Centaur)

1270年頃 作者不詳
The J. Paul Getty Museum所蔵
Google Art Project

イタリア好きの方なら、パルテノペがナポリの旧都市名であることをご存知かもしれません。しかしこの小説では、ギリシャ神話などで登場する怪物、セイレーンの名前を指しています。

美しい歌声で、旅人を海へ引き摺り込むこの怪物は、三人の姉妹だったという説があります。そのうちのひとりがパルテノペと呼ばれており、「処女の声」を意味します。

あるとき、ひとりの勇者が現れて、彼女の誘惑に打ち勝ちます。するとパルテノペは悔しさのあまり息絶えて、ある海岸に漂流したといいます。人々はその海岸の街、つまり今のナポリをパルテノペと名づけ、神殿を作り祀ったといわれています。

Ulysses and the Sirens

1891年 John William Waterhous
出典：The Art History Archive

## オデュッセイア

古代ギリシアの長編叙事詩。トロイア戦争を描いた『イーリアス』と同様に、詩人ホメロスによって創作されたと伝えられている。
イタケーの王であるオデュッセウスはトロイア戦争の凱旋中に漂流し、ひとつ目の巨人や海の怪物たちに行く手を阻まれる。彼はアテナの協力を得ながらそれらの困難に打ち勝って、妻や息子の待つイタケーへ辿りつく。
「パルテノペ」劇中では、聡志が図書館でこの本を読んでいる。聡志という少年の正義感、ヒロイックなものへの憧れを強調するような演出となっている。

Tristan and Isolde

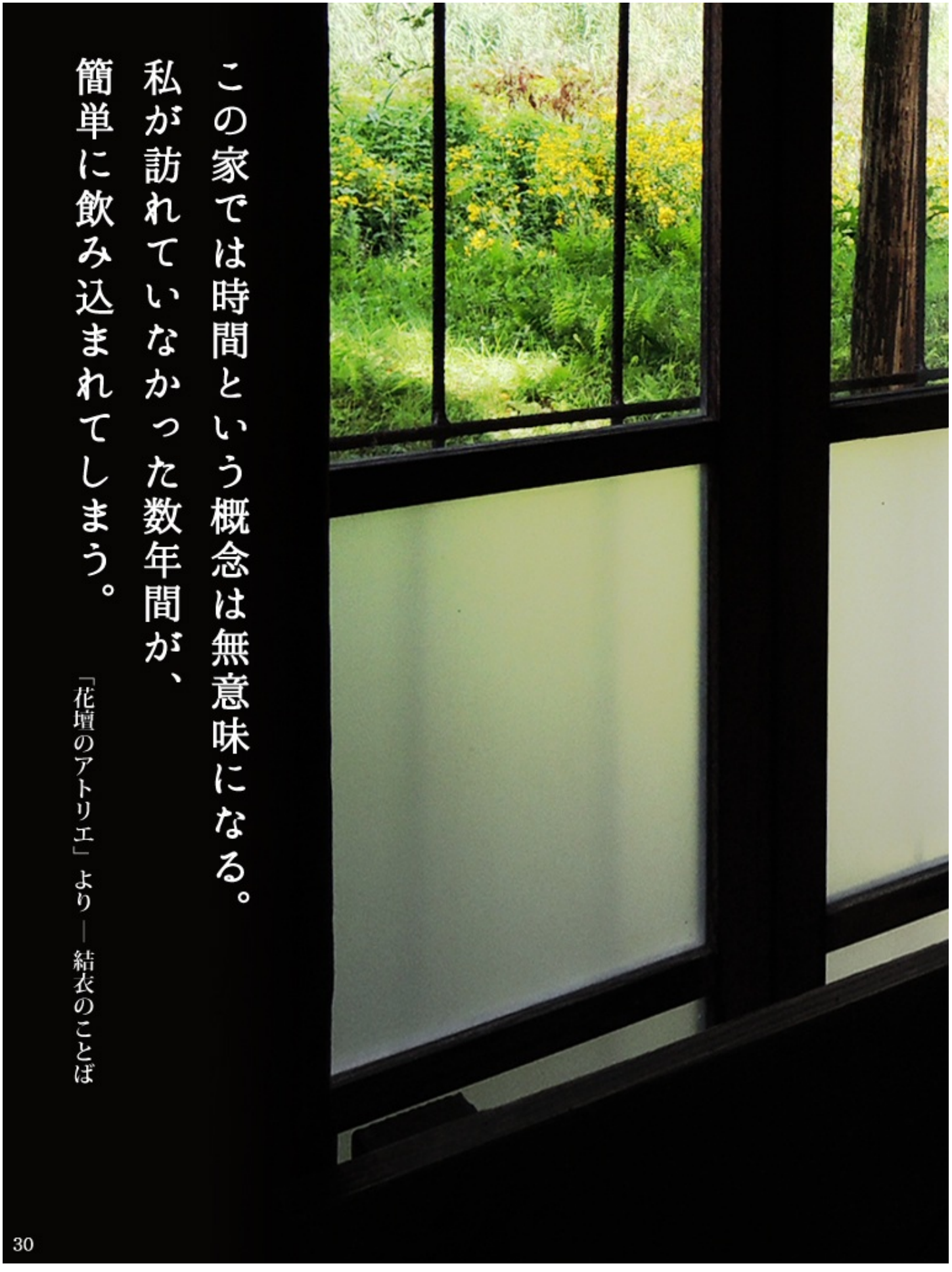
製作年代不詳 Hughes Merle
出典：http://www.artrenewal.org/

## トリスタンとイズー

ケルトの説話を起源とし、中世フランスで編纂された恋愛物語。のちにドイツなどヨーロッパに広まった。シェイクスピアの「ロミオとジュリエット」もこの物語の影響を受けたといわれている。オペラの知識がある方には、ワグナーの楽劇「トリスタンとイゾルデ」（イゾルデはドイツ語読み、イズーはフランス語読み）でご存知のことだろう。
騎士のトリスタンと、主君マルク王の妃イズーは愛の媚薬を誤って飲んでしまい、永遠の恋に落ちてしまう。死ぬまで愛に苦しむ二人の物語に中世ヨーロッパの人々は心を打たれ、多くの写本が作られ現在まで読み継がれていった。
日本語訳では「トリスタン・イズー物語」（ベディエ著、佐藤 輝夫 訳 岩波文庫）、「フランス中世文学集1 信仰と愛と」（新倉 俊一・天沢 退二郎・神沢 栄三 訳 白水社）などが出版されている。
劇中では郁がこの作品を図書館で見つけ、読み耽っていた。
彼女は社会に縛られている窮屈な自分と照らし合わせて、恋愛よりも二人の境遇に共感していたようだ。

# No.4

# 「花壇のアトリエ」の世界



この家では時間という概念は無意味になる。
私が訪れていなかった数年間が、
簡単に飲み込まれてしまう。

「花壇のアトリエ」より ― 結衣のことば

# 閉じた世界で、傷を癒す
## 「花壇のアトリエ」あらすじ

大学生になった結衣は、久しぶりに先生の家を訪れた。
外の世界から隔絶された庭と家は、離れていた時間がまるで存在していなかったのように、以前と変わらず彼女を受け容れてくれた。そして先生も、少女のような笑顔と美しい体躯を保ったまま、彼女を優しく迎え入れてくれた。
結衣は先生に失恋を打ち明ける。愛していた恋人に、信頼していた親友に、彼女は裏切られてしまった。彼らは結衣の知らないところで心を通わせ、愛し合い、彼女の元から去っていった。先生は話を聞き届けると、優しく結衣を抱きしめてくれた。
人に傷付けられるのであれば、ひとりのままでいい。そう主張する結衣は、先生を理想の姿としてみていた。小学六年生のときに出会った図工教師の先生は、美しく、まわりの平凡な人々とは異なる別世界に生きていた。小学校を卒業しても、家に押し掛けて絵を習うほどに憧れた先生。しかし彼女はひとり家の中で、自分の世界に生きていた。結衣は今の自分と先生の生き方を重ね合わせるが、先生は微笑みながら、結衣の考えを優しく否定するだけだった。
過去に傷を持つ二人の女性の交流を描く、癒しの物語。

「センチメンタル（短編集）」
「花壇のアトリエ」

**Amazon.co.jp**
http://www.amazon.co.jp/-/e/B00E8D9CY0/

「センチメンタル（短編集）」は表題作「センチメンタル」「かたち」「パルテノペ」「花壇のアトリエ」の4編を掲載。
「花壇のアトリエ」のみの単体版もあります。
上記URL、或いは著者名の「塩澤源太」で検索してください。

# 登場人物と関係図

## 結衣

主人公。大学三年生。小学生のとき先生と出会って以来、彼女に憧れ続けた。久しく会っていなかったが恋人と親友に裏切られ、5年ぶりに先生の家に訪れた。

## 先生

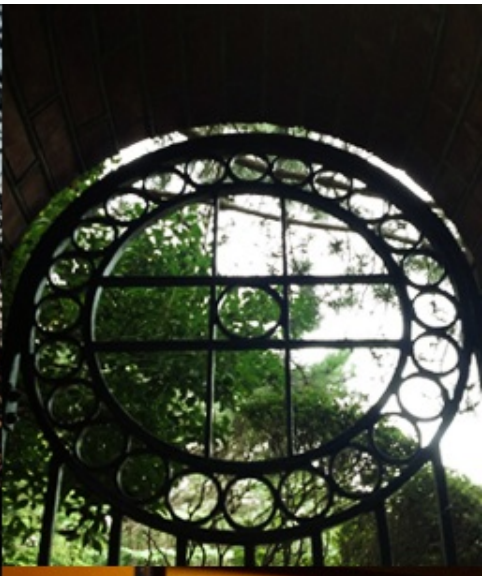
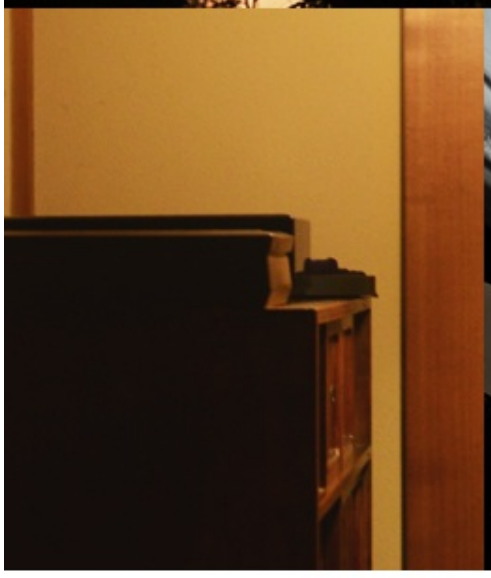
結衣の小学校時代の図工教師。結衣が卒業してから三年間、個人的に絵を教えていた。両親のいない家で女性ひとりで暮らしている。

主人公の結衣は、ごく普通の大学生活を送っていましたが、あるとき親友に彼氏を奪われてしまいます。愛するものを失った悲しみ、信頼するものに裏切られた悔しさが彼女を襲い、いたたまれなくなり先生の家を訪ねます。

先生は結衣が小学六年生のときに赴任してきた図工教師で、結衣にとって理想の女性でした。卒業後も離れるのが嫌だったので、絵を教えてもらいたいと頼み込み、彼女の自宅に三年ほど通い続けていました。

先生は美しい容姿で、世間とは異なる価値観を持った孤高の女性です。誰もいない古い家で絵を描いては、孤独を受け容れながら生きています。失恋で傷付いた結衣は、そんな先生に再び憧れを抱き、孤独や思い出に打ち勝つ方法を学ぼうとします。

German chamomile © kallerna, 2009

# 庭と家屋

## 東京近辺の和洋折衷建築

### 旧モーガン邸

建築家J・H・モーガン住居。現在は火災により焼失。
神奈川県藤沢市大鋸1122

### 朝倉彫塑館

明治40年築。彫刻家・朝倉文夫のアトリエおよび住居。
東京都台東区谷中7-18-10

### 旧安田楠雄邸

大正8年築。実業家・藤田好三郎が建てた近代和風建築。
東京都文京区千駄木5-20-18

※上の写真と紹介している建築は関係がありません。

「花壇のアトリエ」に登場する人物は二人だけ、そして舞台は先生の自宅のみという限られた世界で物語が展開します。

庭では緑がおおらかに茂り、それらに囲まれた家は時を忘れたかのように静かに佇んでいます。この家のモデルはひとつではなく、東京周辺に点在する和洋折衷の建築を部分的に取り入れています。

例えば橙色の瓦は藤沢の旧モーガン邸、屋内は朝倉彫塑館や旧安田楠雄邸などです。

家や庭には、住んだ人々の歴史や思いが刻まれています。世界から隔絶されたその場所で、先生とその家族はどのような生活を送っていたのでしょうか。

# 先生のテーブル

## 料理とハーブティー

先生の家では、来客があるとハーブティーを淹れる習慣があるようです。先生はゲストの心情を察知して、どのお茶を出すか決めています。結衣が訪れたときには、彼女の傷付いた心を癒すため、気持ちを落ち着かせる効果があるラベンダーを選びました。

昼食の場面では、先生はイタリアの郷土料理の干し肉や、各地方のピクルスを食卓に並べました。どれも手作りなのですが、彼女が孤独に過ごした年月を象徴するような、味わい深いものばかりです。

このように、登場する料理やお茶は、人物たちの心理を映し出す大事な役割を担っています。

## ケッパーベリー（写真下）

風蝶木（フウチョウボク）の実をビネガーで漬けたもの。
よく知られているケッパーは花になる前の蕾だが
ケッパーベリーは花が咲いた後の実を使う。
イタリアやスペインでは一般的な食材で、ワインや
スモークサーモンなどと一緒に食べると美味しい。
柔らかく、粒々の食感が面白い。
劇中では昼食のつけ合わせとして登場する。

## カモミール

キク科カミツレ属。林檎の果実に似た香りがする。古くから万能薬として用いられており、ハーブティーとしての効能は鎮静作用、整肌作用、抗炎症作用、また、下痢や胃炎などにも効く。植物のお医者さんと呼ばれるように、他の植物を健康にする働きがあり、害虫や病気の予防に用いられる。
劇中では先生が昼食後に淹れたお茶。花壇にもこの花が植えられている。

## クローブ

インドネシア原産のチョウジノキという植物の花蕾。紀元前から殺菌・消毒剤として用いられており、漢方薬や香辛料としても重宝される。食欲不振や消化不良の解消、胃痛や吐き気などにも効く。独特な香りがあるわりに、さっぱりとした飲み口。フルーティーなハーブティーとブレンドすると相性がよい。
劇中ではカモミールに入れている。

## ラベンダー

地中海原産、シソ科の薄紫の花を咲かせる常緑樹。ラベンダーの香りは精神安定に効果があり、不眠や偏頭痛、鬱や不安、疲労の解消などに効く。ハーブティーとしても有名だが、少し味に癖があり、薄めたりブレンドティーにすると飲みやすくなる。
劇中では結衣が先生の家に訪れた際に登場する。

## 蜂蜜

劇中で先生が、ラベンダーのハーブティーが飲みづらい場合に入れることを勧めた。豊富な種類があり、それぞれはミツバチが採取する花の蜜によって分けられる。風味や色が異なり、例えばアカシアは見慣れた透明の麦藁色をしているが、レモンは不透明の明るいベージュ色である。
写真は菜の花を中心に、春の花々の蜜を集めたフランス・アビディス社のfleurs printanières。

「センチメンタル」の表紙を飾る、美しいイラストたち。それらは優しく、可愛らしく、それでいてどこか切ない匂いがします。

作者は現在、ウェブデザインを中心に活躍しているマルヤマルミさん。ウェブはもちろんプロダクトや平面デザイン、写真など、彼女の溢れるクリエイティビティはジャンルの壁を軽やかに飛び越えてしまいます。

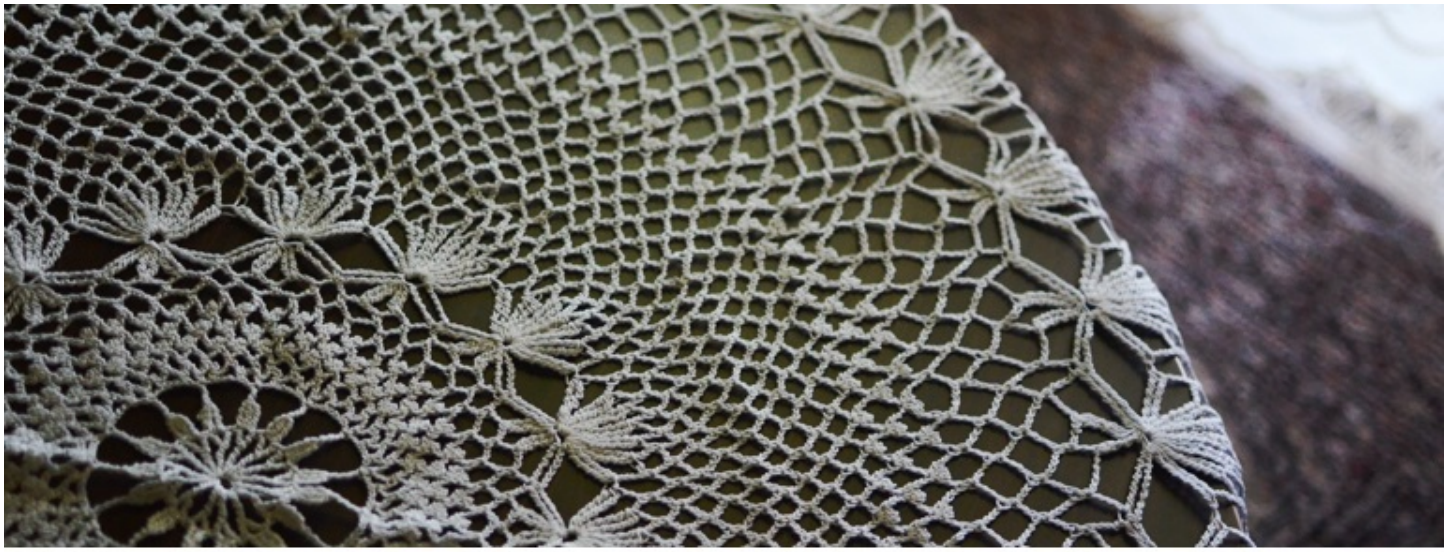
彼女の描くイラストレーションには、相反する二つの感情が同居しています。儚げで不安定な気持ちと、前へと進んでいく意志の強さ。女性が持つそんな矛盾した美しさが、劇中の登場人物と重なります。

# Maruyama Rumi

## 軽やかに踊る、心の色彩

女子美術大学芸術学部卒。プロダクトデザインを修了後、ウェブデザインを中心に活動する。
「やさしい夢のように、あたたかい記憶として残るものをつくっていきたい」、それが彼女のモットー。
http://marude.mond.jp/

© Rumi Maruyama, 2013



私はこのガイドブックの企画が生まれたとき、とても面白い試みだと思いました。個人作家が作る電子書籍の小説には、このような書籍が作られることはほとんどなかったからです。

個人作家には、創作以外にやらなければならないことがたくさんあります。とりわけ販売促進は注力すべき重要なもののひとつです。しかし作品数を増やすことも同じくらい重要なため、作家のジレンマとなり、結局ひとつの作品に掛ける時間を犠牲にしてしまいます。

しかし私の執筆活動の原点に立ち戻ると、こういった状況は少し不本意に思います。私は作品ひとつひとつに情熱を注ぎ、自分や読者の心にいつまでも残るような創作がしたいのです。

だから今回の企画は、未読の方たちに興味を持っていただく販促機会を作りながら、作品の世界観を広げ、深めることができる面白い試みだと思いました。写真撮影やレイアウト編集もデジタル技術によって容易になり、執筆や他の活動に支障をきたすことがありません。何より作品を作る際に得た興味深い知識や取材先を紹介できるのは、とても喜ばしいことです。今後も作品に愛着を持ってもらえるように、さらなる企画を考えていきたいと思っています。

そして今「センチメンタル（短編集）」の楽曲作りに取り組んでいます。オーケストラ・グループを率いる作曲家の方にお願いして、小説の世界観を表現していただきます。ピアノや弦楽器による映画のサントラのような素敵な作品に仕上がると思います。これは私も楽しみで、読者の方々と一緒に聴けることを、今から心待ちにしています。

# あとがき

## 著者 塩澤源太

©Genta Shiozawa, 2013
本作品を全部また一部を改竄、また有償で本データを第三者に譲渡することを禁じます。
作品内の一部の写真・画像の著作権は個別に記載された表示に従います。

GSE0001AK01

小説「センチメンタル」読本
2013年12月1日発行

Web site : http://www.gentashiozawa.com
Amazon : http://www.amazon.co.jp/-/e/B00E8D9CY0/
Twitter : @Gentainfo
Facebook : http://www.facebook.com/gentainfo
E-mail : genta.info@gmail.com